

第8回市史講座ミニレポート：平成27年11月14日（土）

尼子氏の滅亡と「御一家再興」戦争

講師：中野賢治先生（山梨県立博物館学芸員）



中野先生は「尼子氏の滅亡」と「御一家再興」のテーマで毛利氏による尼子氏の攻略と尼子勝久らの尼子氏再興戦の二つを取り上げ、これまで語られていた「通説」への疑問点を述べられました。

勝久による「御一家再興」戦は、尼子義久が毛利氏に降伏したことに端を発します。従来、義久については永禄9年11月の富田城退去に至る状況のみ語られ曾祖父経久、父晴久に劣る人物との評価ではありましたが、永禄3年12月晴久が没し、家督を継ぐ前から文書発給23通が確認され、後継者として順調な継承をしていたと説明されました。また、晴久生存中から毛利氏は足利將軍義輝などを介して尼子氏との和睦交渉を行っています。毛利氏は九州・石見と転戦し、尼子との戦いに初期は和睦を模索していたのです。しかし、永禄5年、大森の本庄常光が毛利氏に降伏し、赤名氏が尼子氏から離反し

たところ、毛利氏は出雲侵攻を始めます。

それに、出雲国内の有力諸氏の尼子氏からの離反、毛利氏への降伏がある上、毛利氏は伯耆の山名氏、因幡の武田氏、備中の三村氏など国外の有力勢力からの揺さぶりを尼子氏へかけはじめました。そして、ついに永禄5年出雲への大攻勢をかけ、富田を攻略します。義久の技量にかかわらず、すでに、尼子の運命は継承の時点で決していたといえます。

この落城を機に、勝久の再興戦が起こります。中野先生は勝久軍が毛利氏の北九州への出兵中の空白をねらって、九州の大友氏、備前の浦上氏、但馬の山名氏などの援助で海から出雲へ侵攻したとされ、出雲の諸勢力も同調して、はじめ攻勢であったのが、永禄12年2月の布部合戦で大敗します。この大敗で一気に再興軍は崩れ、翌元龜2年には出雲から逃れ転

戦を始めました。これは布部合戦の敗北が原因であったからと従来言われてきましたが、それも契機にはなりますが、味方した出雲諸氏は晴久・義久の安堵状を所持し、晴久時代への支配体制への回帰を望み、一方勝久側は毛利氏に降伏した義久を断絶した尼子氏と位置づけ、勝久主導を目指しました。これは出雲諸氏の思惑とちがっていたのだと解説されました。それは勝久独自の安堵状がほとんど認められず、晴久の安堵状を根拠とした継目安堵が求められ、さらに義久の安堵状を根拠にするものも確認できないからです。

このように出雲諸氏との思惑の相違と、入国時の海からの援助者の支持もなくなりついに出雲からの転戦を始めたと話されました。勝久軍は因幡・伯耆と転戦し、再興への援助者を探します。そして、織田政権下で対毛利氏の最前線におかれ、ついに再興戦は終焉を迎えました。

中野先生は義久の評価、外部勢力からの圧力を使った巧みな毛利氏、再興のための援助者を得て進攻に成功しつつも、在出雲の諸氏との思惑違いでそれらを生かし切れず、さらに出雲脱出後の転戦の中で援助者を探し続けてもすでに、外部勢力の支持を得られず、駒として使われ夢潰えた勝久軍について語られ、外部勢力の支持が命運を決する点でもあると話されました。

その他にも、有力領主の断絶と再興めぐる多くの事例がある中の一つが尼子再興戦であったとも話されました。